

# 【ねがいはましては】

令和3年2月25日

KYOWA SCHOOL

第363号

「きっかけ」

東京大学准教授の平沢達也さんが、小説で最も印象に残っているのは、あのコナン・ドイルさん（名探偵シャーロックホームズ等）の書かれた「失われた世界」だそうです。その中で最も強く印象に残っているのが、チャレンジャー教授らが生け捕りにした翼竜をお披露目するシーンだそうです。中学生の頃に読み、豪快で型破りなチャレンジャー教授にあこがれた平沢准教授は、「古生物学者になりたい」という夢を実現させました。現在では、恐竜をはじめとする古代の脊椎動物の進化を研究しているそうです。

さかなクンこと、宮澤 正之（みやざわ まさゆき）さんは、きっかけが「タコ」だったそうです。小学校2・3年生の時、友だちが何か書いているのを見たとき、ぎょっとしたそうです。ノートから飛び出てくるくらいの迫力のある「タコ」がそこには書かれていたそうです。「おお、なんだこれは？」さかなクンは魚屋さんへ行ったり、水族館へ行ったりと、その友だちの絵に出会わなければ、今のさかなクンはいなかったと言っています。

歴史家の磯田道史さん、実家が岡山県、備前岡山藩の支藩である備中鴨方藩重臣の家系だそうです。家には古文書などが残されており、お名前の道史の道は、代々受け継がれている通字だそうです。そのせいか、子どもの頃から歴史好きで小学校当時、近隣の石仏の拓本をとって回っていたそうです。また、『近世古文書解読辞典』を使い、図書館にある古文書の解読をしていたそうです。小学生がです！

この三人の方々に共通することは、『好き』です。学校の勉強などそっちのけで無我夢中で取り組む姿が想像できます。また、その夢中に必須なものがあります。それが『語彙』です。好きをさらに好きに変化させていく土台が『語彙』になります。

私は、語彙の土台は本を読むところから始まるとは考えていません。土台は小さい頃からの会話です。人とのコミュニケーションだと考えています。「おかあさん、〇〇ってどういういみなの」から始まります。

おそらくこの三人の方々も、小さいときに家族を質問攻めにしていたのかもしれませんが。会話が弾みます。そのうちにそっと手にした絵本などに興味をもち、そこからまた質問が飛び出てきます。ある程度語彙が定着すると次第に目の前の本の中に繰り広げられる物語の世界に引き込まれていきます。想像の世界は好奇心を成長させ、さらに「知りたい」が加速します。そこまで来ると、もう自走可能な状態が完成に近づきます。

次から次へとめぐる好奇の目は、語彙をどんどん吸収していきます。やがて人との意見交換が始まります。自分の意思を相手にぶつけるようになります。「ボクは、〇〇〇のように思うんだ」などと、今まで吸収したことをまとめながらことばに発していきます。このすべてが学校教育につながる土台です。教科書に触れることなく、自らの手で表現力を手にしていきます。もちろん早い段階でその能力が身につけているわけですから、学校でいざその分野が始まったとしても即対応できてしまいます。新しい学びなどその子にはないことになります。

片や、語彙に親しむこと（他人と会話で触れ合うこと）から遠ざかっていた子にとっては、基礎的なものが十分に備わっていないことになりますので、漢字など練習していても意味を理解しないままの練習になってしまいます。

学校教育内での漢字等は、テストという媒体で結果が数値化されます。しかしその数値は書けたか書けなかったかの数値であり、意味まで把握していたかまではなかなかわからないと思います。つまり「書けるけど使えない」という状態がつくられます。結果、「ぼくは〇〇のように思います」といったような表現力がほとんど育たずに成長していくことになります。その差はどんどん開くばかり、やがて教科書はかなり難しい表現をますます増幅させ、彼らを混乱の渦へと導いていくことになります。

自分の意思を他人へ正確に表現することが出来ない状態です。ストレスは限界に達します。それを知らない家族は、学校からのテストを片手に怒りの言を子にぶつけていきます。悪循環の発生です。家族は徐々に壊れていきます。

人と人との間に最も必要なもの「信頼」、これが「ゼロ」になります。暴言や虐待が飛び交う現実が目に見えます。

大切なことは、子が今、たった今、精一杯に生きようとしているか、それだけを見つめるという姿勢を家族は持たねばならないと思います。学校は現実です。分かっているにもかかわらず、合っていれば「〇」がもらえます。偶然まぐれで当たれば「〇」がもらえます。

出会い、どのような出会いでも構いません。人・本・生き物・乗り物・雲・星・景色・色・・・何でも構いません。今掲げたものはすべて競うものでも何でもなく、純粋にその子の目の前にあっただけのものです。子は何でも競争に繋がります。何でもです。食べることで、しゃべることで、走ることで、投げることで、何でもです。子どもたちが複数集まって遊ぶ内容は、競うものがことごとく幅をきかせています。

私が幼少のころよくやっていた遊びがあります。「おままごと」です。今はどうなのでしょう。ほのぼのとした時間が流れる遊びでした。将来、こんな家庭がいいなあ・・・。

さて、出会い、その出会いをきっかけに、精一杯の時間を過ごしてみてください。